

黄表紙『優美源氏鎧雛形』（安永六年刊）について

有 働 裕

A study of *Yasagenji yorohingata*
(Kibiyoshi, published in Anei 6)

Udou Yutaka

本稿は、東京都立中央図書館加賀文庫蔵の『優美源氏鎧雛形』についてその書誌的記録を述べ、写真版および翻刻を示し、注釈と解説を付したものである。なお、写真版は国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース上に公開されたものを使用した。また、翻刻にあたっては、大東急記念文庫本を参照した。閲覧および掲載をご許可いただいた都立中央図書館加賀文庫および大東急記念文庫の皆様に感謝申し上げる。

一、書誌的記録

(1) 本書については、国文学研究資料館の『国書データベース』に以下のように記されている。

著作ID 1768996
統一書名 優美源氏鎧雛形（やさげんじよろいひながた）
（Yasagenji yorohingata）
巻冊 三卷
角書 伊藤館北条館
著者 柳川／桂子（Yanagawa Keishi） 作
鳥居／清経（Torii Kiyotsune） 画
分類 黄表紙
成立年 安永六刊（1777）
国書所在 【版】 日比谷加賀、大橋、大東急
著作種別 和古書
著作ソース 『国書総目録』所収、1

また、『東京都立日比谷図書館蔵 加賀文庫目録 補訂版』（昭和五五年発行）の「小説・物語（黄表紙）」の項には、次のように記されている。

10063 伊藤館／北條館 優美源氏鑑雛形 函83—11

柳川桂子著 鳥居清経經画

江戸 鶴屋喜右衛門 安永6

3冊合1 小

なお、棚橋正博氏の『黄表紙総覧 前篇』（青裳堂・一九八六年）には以下のように記載されている。

○伊藤館／北條館 優美源氏鑑雛形

三卷・三冊・十五丁 柳川桂子作 鳥居清経画 鶴屋板

○序文、跋文ナシ・桂子作（十五ウ）・鳥居清経画（十五ウ）

○柱題「やさ源氏」（一～十五丁）

〔備考〕次書（訛源氏／後日巻 頼朝七騎落、有勸注）の前編。伊豆蛭が島に流罪となった頼朝をめぐる安達盛長・伊東入道・文覚・真田与一の説話を織りまぜる。

加賀文庫本の体裁は以下の通りである。

(1)表紙 後のもの。無地。水色。一七・五cm×一二・七cm。「伊東館／北條館 優美源氏鑑雛形 全」と墨書された後の題簽

（一四・四cm×三・一cm）が貼付されている。

(2)題簽 中巻の原題簽（一三・一cm×九・七cm）が表紙見返しに、下巻の原題簽（一三・三cm×九・五cm）が裏表紙見返しに貼付されている。

(3)匡郭 十五・五cm×十一・五cm。

(4)板心 「やさ源氏上 一（～五）」

「やさ源氏中 六（～十）」

「やさ源氏下 十一（～十四）」

「やさ源氏下終 十五了」

(5)紙数・冊数 各五丁、計十五丁。三冊合一。

(6)画作者 十五丁裏に「桂子作」「鳥居清経画」とある。

(7)刊記 なし。表紙見返しに「安永六年」と墨書。『花粧対兄弟』（柳川桂子作、鳥居清経画、鶴屋板）の一丁表の広告

「西のとし新板もろく」に本書が記載されていることから安永六年と推定される。

(8)彩色 全丁にわたり、朱・青・白・緑・黄・茶色などの彩色が施されている。

また、大東急記念文庫本は加賀文庫本と同版本であり、『大東急記念文庫書目』（昭和三十年発行）には以下のように記されている。

伊藤館／北條館 優美源氏鑑雛形

三卷 柳川桂子作 鳥居清經畫 安永六刊

(冊) 一 (函) 四四 (架) 三一 (番號) 四三二七

大東急記念文庫本の体裁は以下の通りである。

- (1) 表紙 原のもの。無地。黄色。一七・六cm×一三・〇cm。
- (2) 題簽 原題簽はない。「伊東館／北条館 優美源氏鎧雛形 三冊 上中下」と墨書された後の題簽 (一三・七cm×二・四cm) が表紙に貼付されている。

(3) 匡郭 一五・五cm×十一・五cm。

(4) 板心 加賀文庫本と同。

(5) 紙数・冊数 各五丁、計十五丁。三冊合一。

(6) 刊記 なし。表紙見返しに、「安永六年」と墨書。

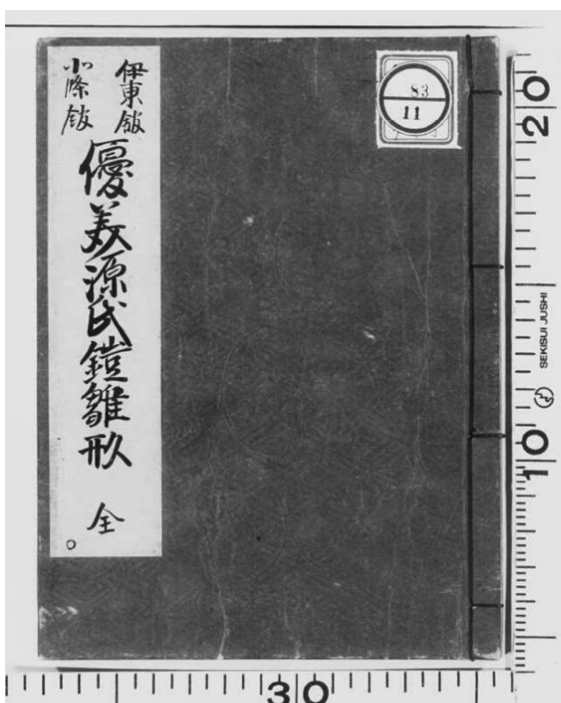
(7) 彩色 なし。

なお、旧大橋図書館 (三康図書館) 本については未見である。

二、影印及び翻刻

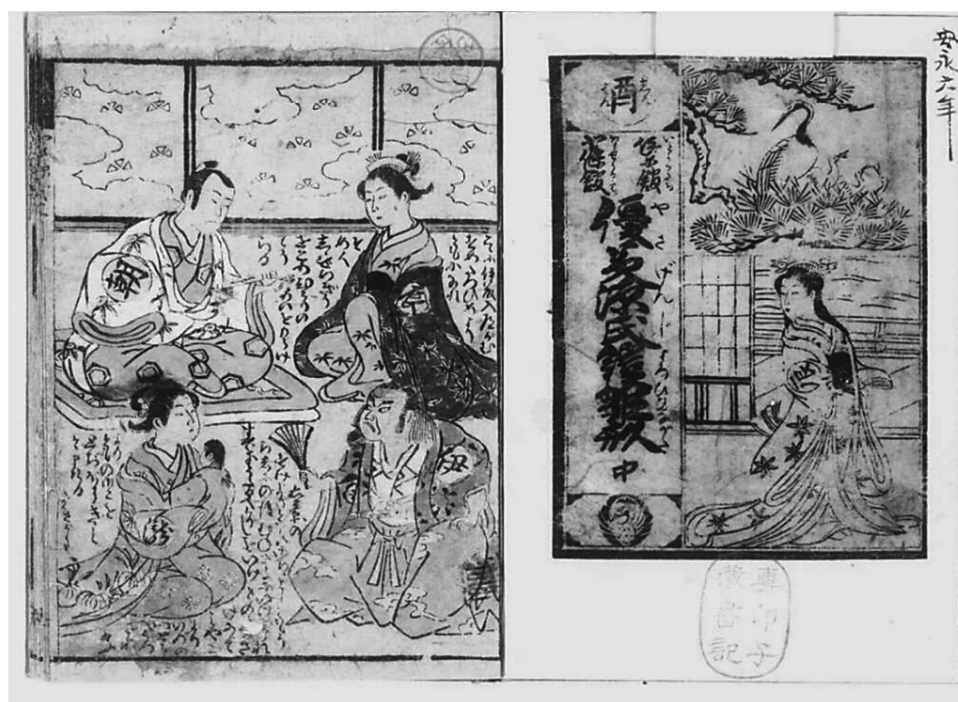
翻刻にあたっては、原本で平仮名表記となっている部分に適宜漢字を当て、原本の表記を振り仮名で示した。また、適宜句読点や鉤括弧を補った。原本で判読しがたい箇所については大東急記念文庫本で補った。

なお、注釈での『平家物語』の本文は梶原正昭・山下宏明校注の新日本古典文学大系 (岩波書店・一九九一年) に、『源平盛衰



(加賀文庫本表紙)

記』は市古貞次・大曾根章介ほか校注の「中世の文学」(三弥井書店・二〇〇八年) に、『曾我物語』は日本古典文学大系 (岩波書店・一九六六年) に、『頼朝伊豆日記』は『竹本義太夫浄瑠璃正本集 上巻』(大学書店・一九九五年) によった。



(題簽)

しん 伊東館

酉

優美源氏鎧雛形 中

はん 北条館

(二丁表)

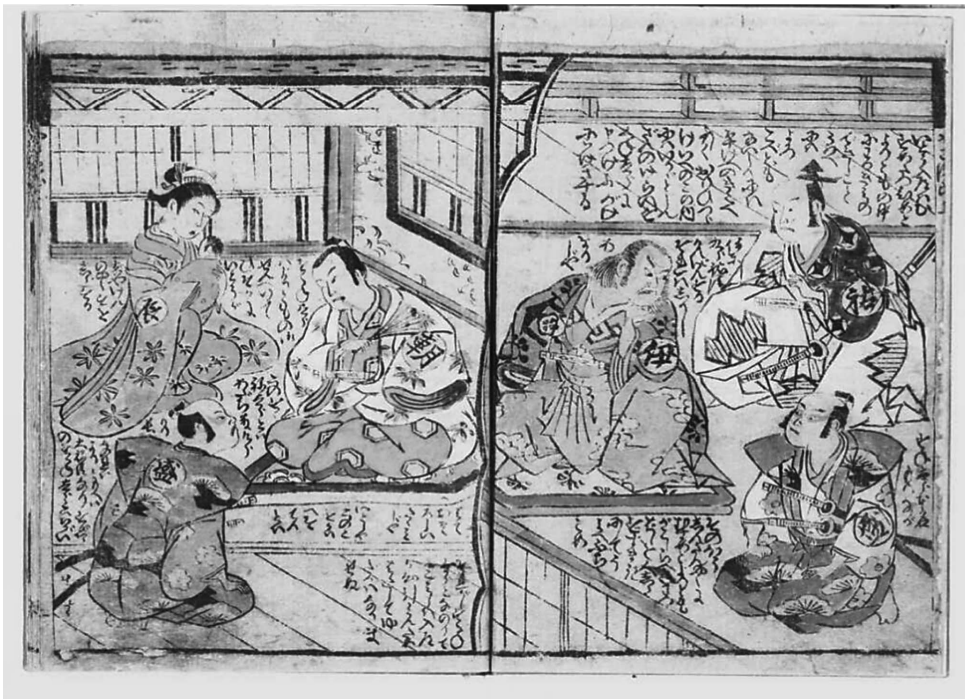
こ、に伊東入道が娘、辰姫、頼朝に馴れ初め、人知らず契りをこめ、一人の寵愛をもうけらる。

右兵衛之佐頼朝は、御父義朝討ち死の後、宗清に生け捕られ、すでに討たるべかりしを、池殿の情けにて都より伊豆の伊東へ移され給ふ。

頼朝の御子をとちぼうぎみと申ける。

瀧川

○右兵衛之佐頼朝―頼朝は平治元年(一一五九)に右兵衛権佐に任じられている。○辰姫―『源平盛衰記』卷十八、『曾我物語』卷二等では三女とのみ記されている(解説参照)。○宗清―平宗清。平頼盛の郎等で、『愚管抄』卷五等には逃亡中の頼朝を捕らえたことあり、『平治物語』卷下には、拘禁中の頼朝を支援したことが記されている。○池殿―藤原宗兼の娘、宗子。平忠盛の後妻。○とちぼうぎみ―頼朝が伊東祐親の三女との間にもうけた男子は、『源平盛衰記』卷十八や『曾我物語』卷二、浄瑠璃『頼朝伊豆日記』などでは「千鶴」となっている(解説参照)。



(二丁裏二丁表)

伊東入道は、娘辰姫と頼朝の中に若君のできしこと、上辺には喜べども、内心には平家への聞へあしく思ひつけ、家の子の内にはいかゞと、新参の家来宿禰太郎に申つけ、柴漬けにつけさせる。「その方、新参役に娘と頼朝がこしらへたわつばしを、人知らず簀巻きにして海へふちこめ。」

宿禰太郎本名盛長。

伊東九郎祐清諫言する。

「それはしかし、あまりじや。」

宿禰太郎は頼朝の御前へ出、密かに伊東が邪険の様子を知らする。

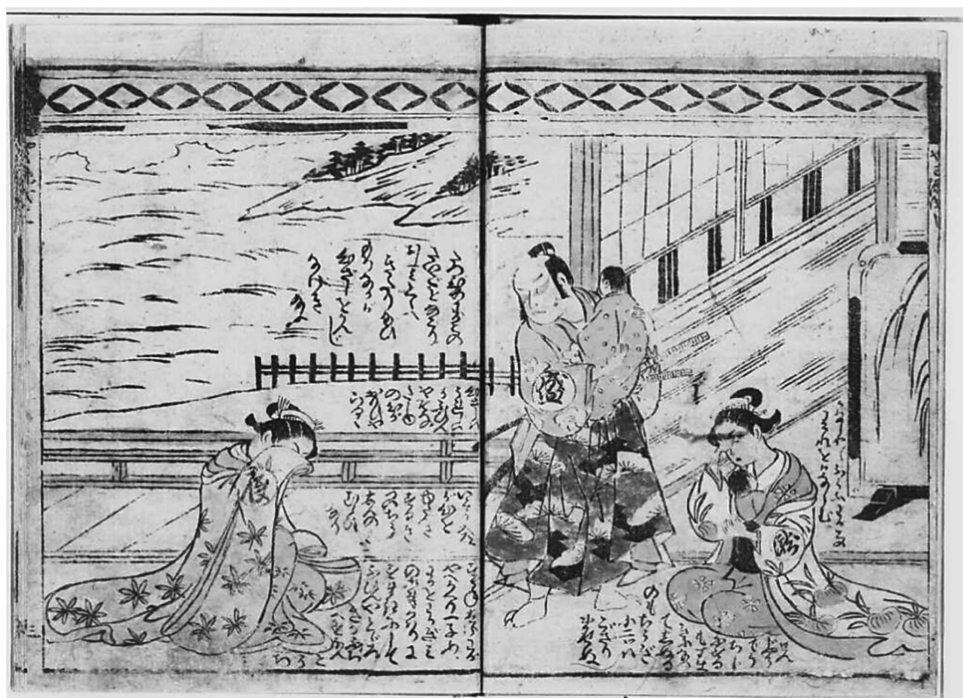
「それがし、宿禰太郎と名のりて入こみしは、入道が心引見んため。果たして油断はなりませぬ。」

「はて、恐ろしい企みじや。」

「いとしや、この子を海へ捨てんとは。」

この宿禰太郎とは安達藤九郎盛長なれば、頼朝へは大忠臣なり。菅原の宿禰太郎とは違います。

○柴漬け―体を簀巻きなどにして水中へ投げ入れること。柴を用いた漁法に由来する名称。 ○安達藤九郎盛長―流人時代から頼朝の近習として仕えた。本文では、『菅原伝授手習鑑』に登場する「宿禰太郎」とは別人、と説明を加えている。



(二丁裏三丁表)

「悲しや、く。」

夫婦我が子の別れを悲しむ。

「戦場で討ち死にするも、簀巻きになつて死ぬるのも、忠義に二ツはござりませぬ。」

辰姫、我が子の最期を名残惜しみ、こゝへ来り給ひ、盛長が心ざしを感じ嘆き給ふ。

「心ざしは嬉しいか、不憫や。そなた衆の心が思ひやらるゝ。」

伊東入道が心を油断さする、きつい忠臣の侍なり。

宿祢太郎我が家へ帰り、一子ふじわかを、若君の御身替りに簀巻きにして、不憫や、とゞろきか淵へすほんとうちこみ。

○とゞろきが淵―若君を柴漬けにして沈めた場所は「源平盛衰記」巻十八では「伊豆ノマツカハノラク、白滝ノ底」。「曾我物語」巻二や「頼朝伊豆日記」などでは「ととき(とどき)の淵」となっている。「郎等呼びよせて、若君いざなひだし、伊豆国松川の奥をたづね、とゞきの淵に柴づけにしたてまつりけり。情なかりし例也。」(曾我物語巻二)「松川のおくとゞきのふちへしづめにつけよ」(頼朝伊豆日記) また、この地を「とどろきが淵」とする伝承が『増訂豆州志稿』(寛政十二年成、明治二十一年増訂)に記され、『大日本地名辞書』にも引かれている。



(三丁裏四丁表)

辰姫、我が子のいのちにつ、かなければ、藤九郎盛長か忠義の程を感じ嘆く。

盛長妻滝川、我が子の別れを悲しむ。

ふじわか最期。

「さあ、とちばう殿は、かくのとをりでござります。」
「でかした、でかした。」

されは伊東がはからひにて、頼朝の若をとろきか淵へすつべしと、検分には伊東九郎祐清へ申付、情なくもついに柴漬けにかけたり。

もとより祐清情ある者にて、身替りと知つてわざと知らぬふりする。

○伊東九郎祐清—伊東祐親の息。平家物語諸本では祐氏。『曾我物語』真名本では祐長、仮名本では祐清。父祐親が頼朝を殺そうとしていることを頼朝に知らせ、北条館に逃がすが、石橋山の合戦以後は平家方に加わっており、『平家物語』では「篠原合戦」(巻七)で戦死したとされている。また、『頼朝伊豆日記』においては、祐清は千鶴君の命を救えなかったことを悔いて切腹する。「こゝに、祐親が次男伊藤九郎祐清といふものあり。ひそかに佐殿へまいり、申けるは、親にて候祐親こそ、ものくるい候て、君をうちたてまつらんとつかまつり候へ。いづくをも御しのび候へ、と申ければ」(曾我物語巻二)



(四丁裏五丁表)

「後かまわずと、盛長殿滝川殿、急いた、く。」

「まづ北条時政の方へ参りませう。」

「さて伊東入道恐ろしくも、頼朝へ毒薬をかはんとせしゆへ、
祐清情ある人ゆへ、頼朝を落とし申す。」

「悉皆焼け出されのやうた。人柄のよい宿無しときてゐる。」

「こちの人、盛長殿、急がなせ、く。」

盛長か妻滝川、頼朝をいたわり申、落ちゆく。

○祐清情ある人ゆへ、頼朝を落とし申す——本書では、頼朝とともに辰姫も北条館へ身を寄せる展開になっているが、『源平盛衰記』卷十八や『曾我物語』卷二では頼朝のみが落ち延びている。その後伊東祐親の三女は、『源平盛衰記』では江間小次郎、『曾我物語』では江間小四郎（北条義時とは別人）へ嫁がされてしまう。また、『頼朝伊豆日記』では、八重姫の名で登場し、継母の手下からの逃亡の末にやつれ果てて北条館にたどり着くが、番人に殺されてしまう。「祐清うけたまはりて、藤九郎盛長、彌三郎成綱をば、君御座のやうにて、しばらくこれにおかれ候べし。君は、大鹿毛にめされて、鬼武ばかりめし具し、北條へ御しのび候へと申おきて、御討手もやまいり候はん、事をのばし候はんとて、いそぎ御前をたちにけり。」（『曾我物語』卷二）



(五丁裏六丁表)

藤九郎盛長、頼朝御夫婦をいざない、北条時政の館へ落ち来り。味方に頼む。

「お心安くおほしめせ。それがしお味方申からは、ちつともそつとも御きづかない義はござりませぬ。イヤ盛長殿、大舟に乗つたと思われよ。」

盛長女房滝川、辰姫をいささない、北条の館へ来たり。時政の秘藏政子の方を頼む。

時政の秘藏姫政子御前、辰姫に対面し給ふ。

「これからは、はばかりながらこちの姫君と、御兄弟とおほしめしませ。」

「やれ、さぞ御苦労なされたてござんしやう。」

○時政の秘藏政子の方―北条時政の娘政子。『源平盛衰記』卷十八や『曾我物語』仮名本には名前は記されず、真名本『曾我物語』では万寿御前、『頼朝伊豆日記』では朝日の前となっている。『又、かの時政に、女三人有。一人は、先腹にて、二十一なり。二三は、当腹にて、十九・十七にぞなりにける。中にも、先腹二十一は美人のきこへ有。ことに父、不便に思ひければ、妹二人よりは、すぐれてぞおもひけり。』(『曾我物語』卷二) 「時政の姉娘朝日の前と申せしは。もはや廿に一とせの。たらぬことしも秋くれど。枕一つのおきふしは。おとこゑらみの色好み。毛嬙西施も面をはぢ。絳樹青琴袂をかざす。」(『頼朝伊豆日記』)



（六丁裏七丁表）

政子の前は頼朝に心を移し、盛長の妻瀧川をひそかに頼み、
「恋を取り持ちくれよ。」

との給ふ。滝川も北条を味方に頼みたく、政子の願いをかなへんと請合ふ。

「何さ、お安いことでございます。そして辰姫君は通り者でございます。」

「頼むぞや、〜。」

時政の嫡子、江間の小四郎義時、後鎌倉の世に武蔵の守と申しは此若の事也。

時政、文覚に對面し給ふ。

こゝに、遠藤武者盛遠は、入道して文覚上人と申けるが、平家追討の院宣を請ひ受け、頼朝に奉らんと、かなたこなたとさまよい、北条の御館に頼朝ましますよし、伝へ聞き訪ね來たる。

「何、貴僧が遠藤武者入道文覚とな。珍しや〜。」

「かたじけなくも愚僧禁裏昇殿して、これみられよ、平家院宣の追討得たり。」

○文覚―「彼文覚と申は、もとは渡辺の遠藤左近將監茂遠が子、遠藤武者盛遠とて、上西門院の衆也」（平家物語巻五）

○江馬の小四郎―北条義時。北条時政の次男。北条政子の弟。得宗家二代目当主。江間は静岡県田方郡、現在の伊豆長岡町。



(七丁裏八丁表)

さても滝川^{たきがわ}が取り持ちにて、政子^{まさこ}の前頼朝^{まらいでう}の寝所^{しんしよ}へ忍び入、思ひのたけを述べかみの、水ももらさぬ恋中となり給ふ。

辰姫^{たけひめ}、滝川^{たきがわ}に恨みをいふ。

「二人^{ふたり}が中へ子^こまでなした、よふもく自ら^{みづか}が大事^{だいじ}の殿御^{とのこ}を寝取らせさしやんした。のふ、悲^{かな}しや〜。」

「お道理^{じやうり}〜、これには訳^{わけ}ありさ。」

文覚^{もんがく}、北条^{ほうじやう}が館^{たて}に足を留^{とど}め、頼朝^{らいでう}に謀反^{むはん}を勧^{すす}める。

文覚^{もんがく}、様子^{ようす}を見聞^{みき}く。

藤九郎^{ふしきやう}盛長^{もりなが}。

○述べかみの「述べる」を「延べ紙」(小型の杉原紙)にかけた地口か。

○文覚：頼朝に謀反を勧める―次の丁にわたって展開される、文覚が頼朝に父義朝の髑髏^{むくろ}を見せて平家討伐を勧める『平家物語』の中のこの場面は、その後の軍記や演劇類に数多く取り入れられている。「ふところよりしろいぬのにつ、んだる髑髏^{むくろ}を一つとり出す。兵衛佐、あれはいかにとの給へば、これこそわたしの父、故左馬頭^{さまたがみ}殿のかうべよ。平治の後、獄舎^{ごくしや}のまへなる苔^{こけ}のしたにうづもれて、後世^{ごせ}とぶらふ人もなかりしを、文覚存^{ぞん}ずる旨^{さだめ}あつて、獄もりにこふて、この十余年頸^{くび}に懸^かけ、山々寺々おがみまはり、とぶらひたてまつれば、今は一劫^{いちこつ}もたすかり給^{たま}ぬらん。されば文覚は、故守殿^{こカウノ}のためにも奉公^{ほうこう}のものでこそ候^{さう}へ」(平家物語巻五「福原院宣」)



(八丁裏九丁表)

文覚上人、頼朝を教訓して、過ぎしころ、野間の内海長田が館にて落命ありし御父義朝の白骨を持つて打擲する。

「これ見られよ。畏れ多くも帝より下し給はる平家追討の院宣、この院宣はすなわち天子の詔り。また、此白骨は過ぎしころ無念の最期を遂げられし、御父義朝公の頭。とれ、やはり父の仰せも同じ事。色に迷ひ酒に長じて国家の政務か、イヤサ、治められますか。こなたのやうな腰抜け武士は、天下の政務は治められまい。大頭といわれようぞ。たわけめが、大ばかめが、サア、阿呆といつて腹がた、ば、此白骨をふつてみられよ。父、に手向かい同然だ。」

「ごめん、もふ、色事はいたしますまい。晩から五人組でも頼みませう。」

政子の前、辰姫の心を恥ぢ入、自害せんと給ふ。辰姫も政子に寝取られ、死なんとする。北条、藤九郎、兩人やうやく止める。「これ、兩人早まるまい。時政か此訳はつけてしんぜう。」

○大頭といわれようぞー頼朝は大頭であつたという俗説があつた。『平家物語』巻八「征夷大將軍院宣」の「貌大に、せいひきかりき」に由来するものか。「大あたま初手は平家に居候」(誹風柳多留七九編)「頼朝の兎質屋の火鉢ほど」(誹風柳多留一五五編)



(九丁裏十丁表)

菊蟹主計、石川藤次。

「それがよし、く。」

「いつそ押してもらふ事さ。」

伊東入道、山木の判官に心をよする。

こ、に山木の判官かげたか、かねて政子の前にほれていたが、頼朝の色に迷ひ決まりしこと聞き、腹立てる。

「イヤ伊東先生、おれが心のかけた北条の娘も、とうやらこうやら大頭めに水揚げをしられた。業腹な。」

○山木の判官かげたか—『平家物語』『源平盛衰記』『曾我物語』等では山木兼隆。屋牧(八牧)兼隆とも。桓武平氏に属し、父は検非違使や河内守・和泉守・出羽守を歴任した平氏の家人平信綱。兼隆自身も検非違使であった。『源平盛衰記』卷十八や真名本『曾我物語』卷三には、大番役を終えて帰国の途にあった北条時政が、同道していた兼隆に娘を嫁がせることを既に約束していたので、政子と源頼朝との関係を知って驚く、という場面がある。「北条四郎京ヨリ下リケル道ニテ。此事ヲ聞テ大ニ驚。同道シテ下ケル前検非違使兼隆ヲゾ。婿ニ取ヘキ由契約シテケル。国ニ下リ著ケレバ。知ラザル体ニモテナシテ彼娘ヲ取テ兼隆カ許ヘソ遣シケル。」(源平盛衰記十八)



(十丁裏十一丁表)

さても山木の判官は北条の娘を妻にせんと押してもらひか、
 上げたかの郎等、菊蟹主計来り。

「菊蟹主計、大儀く。成程娘を進上といふてくりやれさ。」

時政は山木の判官が望みにまかせ、政子の前を興入さずる。腰元の内に、おすべといふおたふく、寝所の取り持ちする。

「お姫さんか、こつちからお前さんにのほりつめたのさ。」

「それは、空いた口にもちかけ山木が大しやわせじや。」

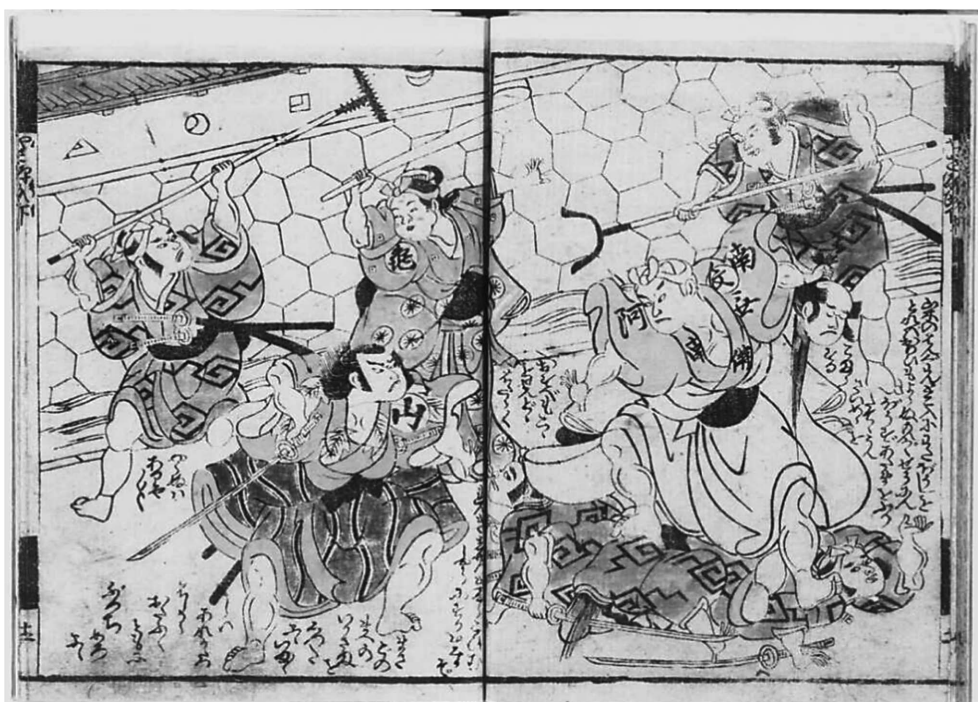
「ヲ、気わる。」

○おすべ—顔の醜い女性を表す語「すべた」をもじつて名前としたものであろう。

○空いた口にもちかけ山—棚から牡丹餅のような幸運だという意味の慣用句に、流行の言い回しの「山」を付け、さらに「山木」とつなげて地口にしたもの。「一杯飲みかけ山のかんがらす」(恋川春町『辞闘戦新寝』安永七年・一七七八)

○気わる—気分が悪くなるような言動に対する軽蔑の感情を示す語。

※『源平盛衰記』十八、『曾我物語』二では、政子は一旦山木兼隆の館に入りはしたものの、一夜も明かさずに抜け出して伊豆山権現に逃げ込み、駆けつけた頼朝とともに北条方に保護される。時政が頼朝の将来を見込んで知らぬ体を装ったため、武威を恐れた兼隆は引き下がることになる。



(十一丁裏十二丁表)

山木の判官、床入に綿帽子をとれば、思ひもよらぬ文覚上人、坊主頭をふりたて、うんさいめらを困らせる。

おすべもこ、を先途と、働く。

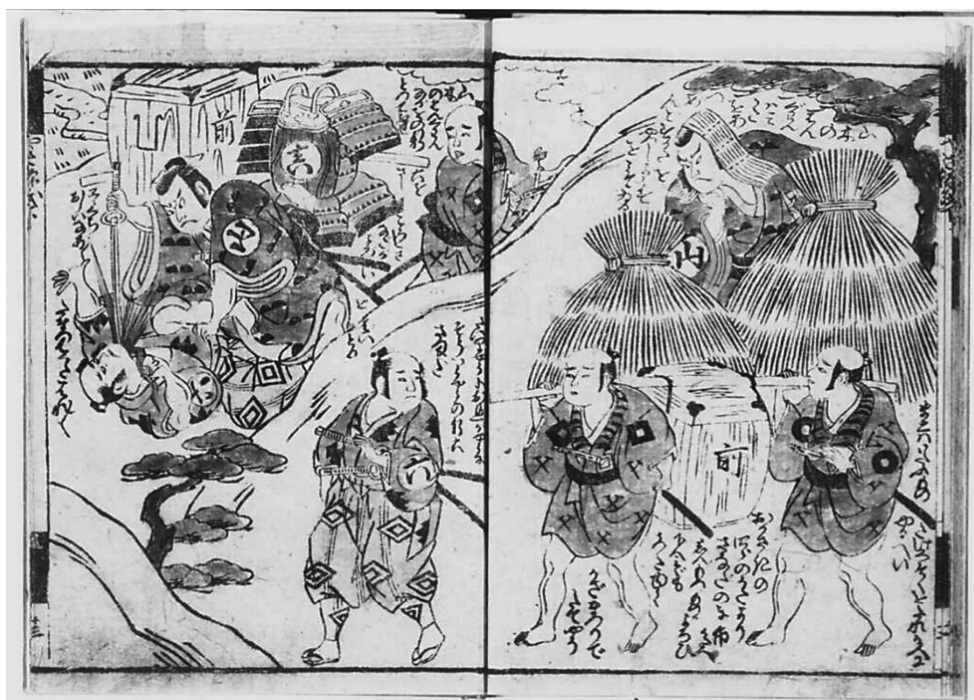
「連木 釈経恋無常にすりますぞ。」

「政子の前のいかさまをくつた。エ、いま〜しい。あれ、かたつはしから、おたふくともにおつちめろ、よし。」

「やらぬは。ありや、〜。」

○うんさい―「有財」。人を罵る時に用いる語。「うんざいがき（有財 餓鬼）」が略されて変化した語。元来は、金銭を貯えていながら鬼のような欲深さを持つ貪欲な人、の意。「ヤアやかましいうんざい共。音にも聞くらん高雄の文覚といふ源氏の腰押し。此の白首はもと我が物。」（近松門左衛門『平家女護島』享保四年〔二七一九〕初演）

○連木 釈経恋無常―連木は播粉木の別称。後妻打ちを思わせる風体でおすべが活躍しているが、手にしている播粉木すなわち連木に、和歌の分類としてよく知られる「神祇、釈教、恋、無情」をかけて駄洒落にしている。



(十二丁裏十三丁表)

山木の判官は味方を集めんと、姿をやつし、様子を見てゐる。

「まとはいたふものた。此具足をたれか人にやるへい。」

岡崎の四郎の方より、真田の与市方へ進物もの、よろひ、下人どもかつきゆく。

「かざまつりてたてやう。」

「宰領におれがやうな惣領の新六様だ。」

山木の判官、長尾の新六を捕つて伏せ 刺し殺し真田がよろいを奪い取る。

「エ、口惜しいなあ〜。」

「黙つてくたはれ〜。」

○まとはいたふものた―不明。纏わいたいものだ、の意か。

○かつきゆく―原文「かつたゆく」。文意を考慮して改めた。

○かざまつりてたてやう―不明。現在の神奈川県小田原市にある地名「風祭」のことか。

○惣領の新六―長男はお人好しで愚鈍なものだ、という意味の諺「惣領の甚六」に、「宰領（荷物を運送する際の監督役）は長尾新六様だ」をかけた駄洒落。

○長尾の新六―長尾定景。通称新六。治承四年（一一八〇）の頼朝挙兵の際には平家方に加わり、石橋山の戦いで頼朝の寵臣の佐奈田義忠を討ち取る。後に頼朝に降伏し、許されて鎌倉幕府の御家人となる。



〔十三丁裏十四丁表〕

真田の与市駆けつけ、共に口惜しがる。

「今一足早く来たらは、このていは見まいものを。」

長尾の新六が弟新七は、真田の与市が家来となり、真田の文蔵といひけるが、兄の最期に駆けつけ悲しむ。

「まつこの具足をしめこのうさぎ。これからおれが真田の与市に紛れ、入り込みて頼朝の大頭の、助平の、すべたの、あんほんだんめを、しめしるしとしてこまそう。」

此草紙が五冊ものと、まだ頼朝めを困らせるが、もふおしつけ打ち出した。

いつも肥前が芝居では大仕掛けは打ち出した。

○真田の与——岡崎義実の嫡男で頼朝の忠臣、佐奈田義忠。

○しめこのうさぎ——しめた、うまくやった、の意の地口。「さてこそ北八がやくそくのしろもの、しめこのうさぎと、いきなり手をやってさぐり見れば」〔東海道中膝栗毛〕五編上・文化三年

〔二八〇六〕

○しめしるし——打ちのめすの意の「しめる」に「印」を付した地口。

○打ち出し——芝居興行の最後の場面。合図の「打ち出し太鼓」にちなんだ語。

○肥前座——豊竹肥前掾が元文年間に堺町に起こした人形浄瑠璃の劇場。回り舞台の仕掛けなどで人気を博した。



（十四丁裏十五丁表）

御台には政子御前、思ひ者には辰姫を寵愛あり。此辰姫、後に丹後の局と申す。島津家の先祖也。

人々祝し申す。めでたし。

されは右兵衛之介頼朝、平家追討の院宣をかうむり、遣右大將とあをがれ、まづ伊東山木を攻めうち給ふ。

山木の判官、敗軍して命から逃げる。

「ゆるせ、く。」

伊東入道山木に一味してこゝにて滅ぶ。まづ手始めに山木の判官を攻めらる。

北条時政、千葉の介をはじめ、さんどに攻め、ついに伊東を生け捕る。

○此辰姫、後に丹後の局と申す。島津家の先祖也——島津家の初代忠久を頼朝の落胤とする説は、島津家の正史ともいうべき『島津氏正統系図』『島津国史』に記載があり、『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』にも記されている。ただしいずれも丹後の局を比企能員の妹としている。北条政子の妬みを恐れて西国に逃げる途中、摂津の住吉神社にたどり着いたところで産気づき、狐火に照らされながら出産したという。

○千葉の介——桓武平氏、平忠常の子孫で、十二世紀前半から下総国千葉庄を本領とし、嫡流が下総権介職を世襲したので千葉介と称した。



(十五丁裏)

桂子作

真田の与市、偽真田を討ち、これより海野の太郎と名のる。

「ごめん、〜。」

侯野、五郎、組み敷かれ、ほう〜逃げゆく。

「兄、長尾の新六が敵、覚へたか、〜。」

この組討ちは近年大あたり、〜。

悪人退治、なをも平家を滅ぼさん。君の御門出、めでたし〜。

「おのれ、よく真田のいかさまをしたな。真の与一はおれだはい。」

江間の小四郎義時駆けつけ、喜ぶ。

鳥居清經画

○侯野の五郎―侯野景久。桓武平氏。父は大庭景忠。侯野は相模国高座郡。景久は源頼朝の挙兵時には兄景親とともに頼朝の軍勢を石橋山で破った。相撲で二十一番勝ち続ける怪力ぶりや、佐奈田義忠(与一)と死闘を繰り広げたことで知られ、歌舞伎の題材にもしばしば用いられた。「侯野敵ノヨスルト思ケレバ、佐奈田与一義貞ト名乗ツルハ落ヌルカト呼ケリ。無下ニ近カリケレバ、義貞コ、ニアリ。問ハ誰、侯野五郎景尚ト名乗ヤ遅、押並テ馬ノ間ヘ落重ル。上ニ成下ニナリ、驛返持帰山ノソバヲ下リニ大道マデ四段計ゾコロビタル。」(源平盛衰記卷二十)

三、解説

本書『優美源氏鑑雛形』と『頼朝七騎落』（前号の紀要で紹介）という続き物の黄表紙は、いわゆる浄瑠璃・歌舞伎の「伊豆日記の世界」を主たる内容とし、そこに曾我物の内容や西鶴の作品を織り込みつつ、当時流行の地口などを所々に配したものである。

「伊豆日記の世界」とは、平治の乱の後に伊豆蛭が小島に流されて流人生活を送っていた源頼朝が、平家打倒の旗揚げに至るまでを題材としたものである。この「伊豆日記」という名称は、人形浄瑠璃『頼朝伊豆日記』（大坂竹本座、元禄六（一六九三）年以前初演）に由来する。

本書においては、流人として伊東祐親に預けられていた源頼朝が辰姫（伊東祐親の娘）と通じ、二人の間に若君「とちぼう君」が生まれるが、祐親は、平家をはばかってこの若君を「とどろきが淵」に沈め、頼朝を殺そうとする。若君は安達盛長の子が身代りになることによって救われ、頼朝と辰姫は伊東祐清の助けで逃げ延び、北条時政の館へ身を寄せる。頼朝と北条政子とが恋仲になると辰姫は嫉妬に狂うが、政子は御台、辰姫は愛妾という形で落ち着き、若君は島津家の祖となる。このような内容が「伊豆日記の世界」にあつてどの程度特徴的であるかを、展開や登場人物が比較的似通った諸作品と比較して、以下に示すことにする。

先に掲げた『頼朝伊豆日記』^①においては、伊東祐親の娘の名は

八重姫、頼朝との間に生まれた若君の名は千鶴殿せんじやうとなっている（『源平盛衰記』『曾我物語』でも若君の名は千鶴だが、祐親の娘は「三女」と記されるのみ）。千鶴殿は祐親の命によって「松川のおくとゝきのふち」に沈められ、それを止められなかったことを悔いて伊東清祐（八重姫の兄）は切腹する。北条の館に身を寄せた頼朝は、時政の娘朝日の前に見初められ、妹背の約束を結ぶ。八重姫は継母の手下に襲われながらも北条の館にたどり着くが、番所の者に刺され、頼朝と朝日前の婚儀を恨みつつ死ぬ。頼朝と朝日の前は八重姫の霊によって熱病によって苦しめられるが、文覚上人の調伏によって鎮められる、という展開である。この浄瑠璃によって形成された「伊豆日記の世界」の基本形ともいうべきものを本書はふまえているが、祐親の娘が若君とともに生き延びる点が大きく異なっている。

なお、『頼朝伊豆日記』以前にも、同様の素材を扱った古浄瑠璃として『石橋山七騎落』『石橋山七きおち』があるが、祐親の娘の名は前者では「三のひめ君」、後者では「すゝきの前」であり、若君の名はそれぞれ「せんつる御せん」「手てつる丸」となっている。^②

宝永七（一七一〇）年正月、江戸山村座初演の歌舞伎『傾城伊豆日記』（津打九平次、同半右衛門作）は、先の『頼朝伊豆日記』を翻案したものとされている。^③しかしながらその展開は複雑化され、登場人物にも変化が見られる。頼朝と通じた伊東祐親の娘の名は万寿の姫、北条時政の娘は朝日の前とされている。題目の

「傾城」は、頼朝と朝日の前の恋仲を恨む万寿の前が、傾城姿となって北条館の酒宴の席に紛れ込むことにちなむものであう。万寿の前の妹千寿の前、朝日の前の妹ふせや等が登場して複雑な展開となり、結びでは、石橋山で敗れた頼朝が安房へ船出した後、取り残された万寿の前と朝日の前が嫉妬の争いの末に両頭の大蛇となり、江の島の弁財天として示現する。若君を淵に沈める場面もなく、本書とは大きく隔たっているといえよう。

宝永七（一九〇七）年竹本座初演と推定されている近松門左衛門の『源氏れいぜいぶし』⁽⁴⁾では、祐親の娘は藤の前の名で登場し、父親が山木判官兼高との縁談を進めているにもかかわらず、頼朝と通じて子を産む。その子は父親の命令で殺されるが、それを描く場面はなく、「やす／＼とうみおとせしに平家の聞へあればとて。父の為にも孫ならずやいとさかりをなさけなく。松川のみなそこにふしづけにしずめ給ふ」という藤の前の台詞によって示されるのみであり、悲嘆にくれる藤の前は兼高によって毒殺されてしまう。なお、この作品には政子は登場しない。

並木宗助・安田蛙文作の浄瑠璃『赤沢山伊東伝記』は、享保十六（一七三二）年十月十六日に大坂豊竹座で初演されている。⁽⁵⁾この浄瑠璃では、頼朝と通じた伊東（祐親）入道の娘は歌形姫、二人の間に生まれた若君の名は友若君となっている。伊東入道から若君を「車が測」に沈めるよう命ぜられた河津の三郎は、我が子を身代わりしようとして果たせなかったものの、頼朝を北条館に逃げ延びさせる。後を追ってきた歌形姫は、父入道の遺言によ

り尼となる決心をし、頼朝は北条政子と祝言を上げる。失敗はするものの若君の身代りを企てるなど、本書との類似も見出せる。

文耕堂・三好松洛・小川半平・竹田小出雲・千前軒作の浄瑠璃『伊豆院宣源氏鑑』は、元文六（一七四二）年正月十四日大坂竹本座の初演だが、伊東祐親の娘乙女の前が一方的に頼朝を恋慕しており、関係を結ぶには至っていない。父が頼朝の暗殺を企てていると知った乙女の前は、その身替りになるために髪を切つて寝所に忍び込むが果たせず、頼朝は討たれてしまう。悲嘆した乙女の前は自害するが、実は討たれたのは身替りとなっていた祐親の三男金吾であった。その後頼朝と盛長主従は北条時政に迎えられて、八牧判官を攻め滅ぼす。従つて、伊東祐親の娘と頼朝の間の若君は登場しないが、高倉宮と源頼政の娘二条院讃岐との間に生まれた若宮が、住吉の海に簀巻きにされて投げ込まれるところを救われる、というように変形されて組み込まれている。

明和七（一七七〇）年十一月に江戸中村座で『女夫菊伊豆着綿』⁽⁶⁾が上演されている。脚本は確認しえないが、明和八年刊の役者評判記『役者子錦衆（下）』の「尾上民蔵」の項に「うつくしいはいふもくだなり。今度の役伊藤娘たつ姫はよふござつた。」とあり、祐親の娘が本書と同じ辰姫の名で登場していたことが確認できる。

福内鬼外（平賀源内）作の浄瑠璃『嫩窠葉相生源氏』⁽⁷⁾は安永二（一七七三）年の初演で、祐親の娘は辰姫の名で登場する。辰姫と頼朝の間には朝若君^{とも}が生まれていたが、そのことを知った平

宗盛に遣わされた長田庄司忠宗が、頼朝と若君を殺すよう祐親に命じる。頼朝は江間小四郎に導かれて逃れたものの、朝若君は海に投ぜられ、辰姫は狂乱する。その後、頼朝に一目会ってから自害しようといふと北条の館にたどり着いた辰姫は、政子の前に妨げられて言い争いとなる。そこに忠宗とともに乱入した伊東入道が頼朝の首を討ち、泣き絶る辰姫をも刺し殺してしまう。しかし、すべては長田庄司の策略であり、討たれたのは実は長田の息子景宗であったことが明かされて、頼朝は政子と結ばれる。意外性に富んだ展開は本書とかけ離れてはいるものの、祐親の娘の辰姫という名や政子との争いなど、類似も見いだせる。この浄瑠璃の初演は肥前座とされており、本書十四丁表に「いつも肥前が芝居では大仕掛けは打ち出しだ」とあることから、何らかの関係性が考えられよう。

初代桜田治助・増山金八作の歌舞伎『大商蛭子島』は天明四（一七八四）年十一月一日江戸中村座の初演で、伊東館から駆け落ちした頼朝と辰姫が、下田の寺子屋で師匠正木幸左衛門と女房おふじを名乗って暮らしているという、飛躍した設定となっている。亭主の好色ぶりに手を焼くおふじであったが、そこへおます（実は北条政子）や清左衛門（実は文覚上人）らが訪ねてくる。結局辰姫が身を引き頼朝と政子が祝言を挙げるが、辰姫は嫉妬にかられて苦しむという展開で、この「辰姫恪気」の所作で用いられるめりやすの「黒髪」がよく知られている。伊東祐親の娘の名が辰姫であり、政子への嫉妬に苦しむ場面があるなど、本書との

類似も見られるが、この歌舞伎の初演は本書刊行の安永六（一七七七）年よりも後のことである。

以上のように、頼朝と辰姫の子が身代りによって生き延び、辰姫と政子の仲も円満に収まる、という本書の展開と同じものは今のところ見出せない。そこに作者の創意があつたとも考えられるが、専門分野の方からの御教示をいただければ幸いである。

ついでながら、本書のように伊豆における頼朝を題材とした草双紙も少なくない。黒本・青本『頼朝一代記』、黒本『富士箱根曾我旧跡』、黒本・青本『上俣野真田下』、黒本・青本『根元石橋山』、黒本『嗚呼勇四人与市』、青本『曾我一代記』などである。この内、伊東祐親の娘の名を辰姫とするのは『頼朝一代記』と『嗚呼勇四人与市』、若君の名を「とちぼうぎみ」とするのは『新板根源石橋山』と『曾我一代記』である。これらの影響関係についても後考を俟ちたい。

注

- (1) 古浄瑠璃正本刊行会編『竹本義太夫浄瑠璃正本集 上・下巻』（解説林久美子、大学堂書店、一九九五年）、佐藤知乃「曾我物の翻案——頼朝伊豆日記（幼曾我）から『傾情伊豆日記』へ——」（歌舞伎 研究と批評）五六号、二〇一六年三月）を参照した。
- (2) 『石橋山七碇落』は寛永以前の刊行かと推定されている。『石橋山七きおち』は正保四年刊の江戸伊勢嶋宮内正本。横山重校訂『古浄瑠璃正本集 第一 増訂版』（角川書店、一九六四年）を参照した。
- (3) 佐藤知乃前掲論文。

- (4) 近松全集刊行会編『近松全集 第六卷』(解題長友千代治、岩波書店、一九八七年)を参照した。
- (5) 義太夫節正本刊行会編『赤沢山伊東伝記』(解題黒石陽子、玉川大学出版部、二〇〇七年)を参照した。
- (6) 義太夫節正本刊行会編『伊豆院宣源氏鑑』(解題伊藤りさ、玉川大学出版部、二〇〇二年)を参照した。
- (7) 役者評判記研究会『歌舞伎評判記集成 第二期 第十卷』(岩波書店、一九九二年)による。
- (8) 安永二年四月三十日。江戸肥前座で上演。平賀源内先生顕彰會編『平賀源内全集 下巻』(名著刊行会、一九七〇年)による。
- (9) 郡司正勝校訂『名作歌舞伎全集 第十三巻』(東京創元新社、一九六九年)を参照した。
- (10) 画作者未詳。永享元年刊か。黒石陽子「『頼朝一代記』について」(『叢』十六号、一九九四年)、同「『頼朝一代記』について(前承)」(『叢』十七号、一九九五年)を参照した。
- (11) 画作者未詳。丹和浩「黒本」^{〔富士箱根〕}『曾我旧跡』について「(『叢』十三号、一九九〇年)を参照した。
- (12) 明和八年刊か。黒石陽子「『夫は石橋山／是は狂言山 上俣野真田下メ』について」(『叢』二十九号、二〇〇九年)を参照した。
- (13) 画作者未詳。明和八年か。黒石陽子「『新版根元石橋山』について」(『叢』三十号、二〇〇六年)を参照した。
- (14) 桂子作、鳥居清経画。安永五、六年ころの刊か。黒石陽子「『四人と一』について」(『叢』二十八号、二〇〇七年)を参照した。
- (15) 画作者・刊年未詳。黒石陽子「青本『曾我一代記』について」(『叢』二十号、一九九八年)を参照した。